

人新世を耕す

帯広畜産大学 筒木潔名誉教授

③

世界で「千分の4戦略」

土壌中の有機炭素増やす

農耕地への堆肥の施用

は、国や時代を問わず最近まで幅広く行われてきたが、これは農業に携わる人間が森林で行われていた自然のプロセスを長年にわたって観察・理解し、それを農耕地において模倣したものである(熊田恭一・土壌環境)。家畜糞尿(ふんにょう)や人糞尿を堆肥原料および肥料として使用してきたのも、自然のプロセスの観察の成果である。

有機資材を堆肥化

農耕地の周りの雑草や灌木(かんぼく)の緑肥としての投入は、在来農業や熱帯の農業においてごく普通に行われてきた。しかし、従来は粗放な方法で行われてきた緑肥の利用も、現在では緑肥の種子を購入して栽培されることが多い。

私は大学の学部から大学院にかけて「腐植酸」の化学的研究に携わって

きた。この研究で学位を得たあと、大学の教員の職に就くのは当時から非常に困難なことだったので、1年半ほどポスドクとして出身研究室で研究を続けたのちに、国際稲研究所(IRRI、Los Baños、フィリピン)の博士研究員に応募して採用された。

国際稲研究所はミラ

クル・ライス(奇跡の米)と呼ばれた新多収短稈稲品種IR18を皮切り

にして多収稲の育種に成功し、稲作における緑の革命に貢献した研究所であるが、その土壌部門は多収稲を普及するための多収稲を栽培するために、多収稲を栽培するには土壌養分(肥料)が必要であるが、開発途上国の農民は経済的にまだ十分な肥料が買える状況ではなかった。

目的は肥効以外も

そのため、私を採用